

【一中】小さきは 小さきままに 折れたるは 折れたるままに コスモスの花咲く

本文:

一中の卒業生も在学していますし、以前勤めた学校の卒業生等も在学中であったので、本日（5/11）唐津特別支援学校体育祭に行ってきました。

一中の卒業生は、応援リーダーとして活躍していましたし、一中の卒業生も以前勤めた学校の卒業生も頑張っている姿を目にして非常にうれしかったです。

また、唐津西高校の3年生も交流・サポーターとして体育祭に参加していました。唐津西高校の引率の先生とも話したところ、この交流・サポーターは希望者殺到だったそうです。ただ、あまりに多くてもということで高校3年生を優先して参加しているとのことでした。進路を考えて高校3年生の参加だと思いますが、そういったことを超えて、交流・サポーターとして多くのことを感じるくれるのではないかと期待します。

私も、参観するたびに特別支援教育が教育の原点だと言われることを実感します。今日も児童・生徒の皆さんが頑張っている姿を見て、昇地三郎先生（故人）の「小さきは 小さきままに 折れたるは 折れたるままに コスモスの花咲く」という言葉のままだと改めて感じていました。福岡教育大教授だった昇地三郎先生（故人）が脳性小児まひの2人の息子のために私財を投じて日本で初めて養護学校として創設された知的障害児施設「しいのみ学園」が13人でスタートしたのは1954年。「科学には限界があるが、愛情には限界がない」とも言われた昇地先生の言葉は、障がいがあってもなくても子どもたちにはそれぞれの能力と可能性があり、それは必ず開花するという事を私に再確認させてくれます。

「しいのみ学園」の名前の由来は、山の中に捨てられた小さなしいのみは、落葉の下に埋められて、人や獣に踏みにじられているけれども、これに温かい水と太陽の光を与えるならば必ず芽をだしてくる、という親の切なる願いをこめたものと昇地先生が言われていました。昇地先生の言葉を思い出しながら、自分自身が水と太陽の光を与えることができているだろうかと反省もしました。

昨年度の第一中の体育大会では、6組の単独参加を通してハンディキャップについて学ぶ場になりました。今年も本校の教育活動等を通して、多くのことを生徒とともに学びたい思いを新たにしたい一日になりました。

写真は唐津特別支援学校体育祭のスローガンです

